

「信じたとおりに」

マタイによる福音書 8:5-13
イザヤ書 55:10-11

2025年9月21日
野村 友美 師

<イエスに「主よ」と呼びかける>

「あなたが信じたとおりになるように。」そう言って、イエス様はある一人の百人隊長の願いにお応えになりました。信じたとおりになる。それは私たちにとって、どういうことでしょうか？願いがなんでも叶うということでしょうか。そうではないことを、私たちは経験として知っています。

信じるとは、一体どういうことなのでしょう。その答えを、今日の物語は私たちに教えています。

イエス様がガリラヤ湖のほとりの町カファルナウムに入られた時、一人の百人隊長が近づいて来て、イエス様に必死で頼み始めた。そう福音書は語っています。百人隊長というのは、ローマ帝国の軍隊に属する軍人です。当時のイスラエルはローマ帝国の支配下にあって、治安を維持するためという名目でローマの軍隊が派遣されていました。その軍隊の小隊長が百人隊長で、文字通り百人ほどの兵士を指揮する立場です。その百人隊長を務めている人が、イエス様に近づいてきて、こう言いました。「主よ、わたしの僕（しもべ）が中風で寝込んで、ひどく苦しんでいます。」この言葉だけ聞くと、「懇願している」というのは大げさに思えるかもしれませんが、ですが、この百人隊長とイエス様の社会的な立場の差を考えると、これはまさに常識外れの言葉でした。支配者の側に属している軍隊の、そこそこに地位がある人が、支配されている側の一般人に向かって「主よ」、つまり「私のご主人様」と呼びかけたんです。

イエス様と一緒にいた弟子たちや、イエス様について来ていた人々は、この「主よ」だけでも飛び上がるほどビックリしたでしょう。その上、この百人隊長はイエス様に「私の僕の病気を癒してください」と、はっきり要求はしませんでした。要求してしまったら、立場的にイエス様には拒否権がなかったからです。もしこの百人隊長が「今から私の家に来て、私の僕の病気を癒してほしい」と、イエス様に言ったとしたら。それはただのお願いではなくて、支配者であるローマ帝国側から支配されているイスラエル側への「命令」になります。そうするとイエス様は、その命令に黙って従うか、命懸けで拒否するしかなかったんです。

実際、この百人隊長にとっては、イエス様に「命令」してしまえば話は早かったでしょう。そもそもユダヤ人たちは、違う宗教文化を生きる外国人と関わることを嫌っていました。たとえ支配者であるローマ帝国に属する人でも、彼らにとっては汚れた異邦人です。軽蔑を込めた眼差しを向けて、隙あらば反抗的な態度を取る、そういう人々を従わせるために、ローマ軍の兵士たちは必要以上に威張り散らしていたようです。だからこの百人隊長も、威圧的なやり方でイエス様に命令するほうが自然だったでしょう。でも彼は、あえてそうしませんでした。ローマ軍の百人隊長という自分の地位を脇に置いて、イエス様に「主よ」と呼びかけて、「癒すか、癒さないか」の選択権をイエス様に委ねました。そうすることで、この百人隊長はイエス様を自分よりも上の立場だと認めて、イエス様の決定に従う意志を表しているんです。

どうして彼は、わざわざそんな態度をとったのでしょうか。何としてでも僕の病気を癒

してもらうために、ヘリくだってイエス様のご機嫌をとろうとしたのでしょうか。どうも、そういうことではなさそうです。

この百人隊長の願いを察して、イエス様は「わたしがあなたの家に行って、その僕の病気を癒してあげよう」と提案なさいました。ですが百人隊長は、せっかくのイエス様の申し出を断ります。主よ、私はあなたを家にお迎えできるような者ではありません。そう言って彼はイエス様に、ただ一言の言葉をくださるようにと願ったんです。

<権威のある言葉>

この百人隊長が信じていたのは、イエス様にはどんな病気でも癒せる力がある、ということだけではありませんでした。遠く離れた場所にいる、見ず知らずの異邦人の病気でさえも、イエス様は癒すことができる。癒す権威をイエス様は持つておられるということを、この百人隊長は信じていました。もう医者にも頼れないほどの重い病気を、直接会うことも触ることもなく癒す権威。人の命の生き死にを決める権威。それは、命を創られた神様だけが持つておられる権威です。

その神様の権威の下にイエス様がおられることを、この百人隊長は信じたんです。どうして信じたのか。そもそもイスラエル民族の神について、異邦人の彼がどこまで理解していたのか。それについては、何もわかりません。伝えられているのは、この百人隊長が何を信じたのか、ということだけです。

権威を持つ人の言葉には、他のものを従わせる力がある。そのことを根拠にして、この百人隊長はただイエス様の言葉だけを求めました。

私も権威の下にある者ですが、私の下にいる兵隊たちは、私が「行け」と言えば行きますし、「来い」と言えば来ます。部下は、私の言葉どおりに従

います。そう言って彼は、神様の権威の下にあるイエス様の言葉を求めたんです。もしかしたらこの百人隊長は、「権威の下にある言葉の力」に普段から、驚きと畏れを感じていたのかもしれませんが。

権威の下にある自分の言葉が、部下たちをどんな命令にも従わせてしまう。だからこそ彼は部下たちに対して、強い責任感を持っていたのではないかと思います。百人隊長はローマ皇帝の軍隊に所属して、皇帝の権威によって命令を下していました。判断を間違えたら、皇帝の名の下に、部下たちの命を危険にさらすことになる。その重い責任を意識しながら、彼は日々、命令の言葉を口にしていたのでしょう。命への責任を意識していたからこそ、この百人隊長は、病気で苦しむ僕のことも放っておけなかったのかもしれませんが。

責任を負う者として、自分に預けられている僕の命を、どうにか助けてやりたい。責任ある主人として、苦しんでいる僕を何とか救ってやりたい。そう願わずにはいられない自分自身の立場に共通するものを、彼はイエス様に感じていたのかもしれませんが。

ガリラヤ地方のあちこちで人々の病気を癒して、悪霊を追い出して、神の国について語るイエス様の噂は、この百人隊長のところまで届いていたはずです。その噂を聞いたからこそ、彼は助けを求めてイエス様に会いに来ました。イエスというその人は、きっと神様の権威の下で、神様から委ねられた人々の命に責任を負っているのだろう。そういうお方なら、この私の気持ちも願いも、わかってくださるに違いない。そう考えて、この百人隊長はイエス様を頼ることにしたんじゃないのでしょうか。

何にしてもイエス様を驚かせたのは、この

百人隊長がただまっすぐに神様の権威を信じて、信じたとおりにイエス様を頼って、すべてを任せただけでした。こんな信仰は、イスラエルの中でさえ見たことがない！とイエス様は驚きながら、従ってる人たちに話しかけます。いつか天の国で、東や西から来た人たち、つまりたくさんの異邦人たちが、イスラエルの偉大な祖先たちと一緒に宴会の席に着くだろう。でもその時、神の民だと言われているイスラエル人であっても、ふさわしくない人々はその場から追い出されて、泣きながら悔しがることになる。

このイエス様の言葉を聞いた時、イエス様について来ていた人々、特に弟子たちは、かなり複雑な気持ちだったんじゃないかと思います。彼らがどんな反応を返したのか、マタイの福音書は特に描いていません。それでも彼らは、神様の民として選ばれて、神様に語りかけられながら長い歴史を歩んできたイスラエル民族の一員でした。聖書の知識もほとんどないはずの、汚れた異邦人の百人隊長なんかよりは、自分たちの方がずっと信仰深いはずだ。なのに、どうしてイエス様はこの百人隊長のことをそんなに褒めて、しかも異邦人が天の国に入るなんて、とんでもないことをおっしゃるんだろう？

そう思って、不満を感じたとしても当たり前でしょう。今ここにいる私たちだって、「洗礼を受けているか」「聖書のことを勉強しているか」なんていう基準で、自分やお互いの信仰を測ろうとする時があるんじゃないでしょうか。

ですが、イエス様の判断基準は違いました。イエス様の言葉と、その言葉が引き起こす出来事が、神様の権威の下にあることをまっすぐに信じている。神様の権威を認めて、イエス様の判断にただ従おうとしている。そんな百人隊長の態度を、イエス様は「これほどの信仰は見たことがない」と言って、

天の国にふさわしいと宣言なさったんです。

<信じたとおりに>

どんな時にも、どんな人にも、どんな出来事にも働きかけて、神様の思いを実現することができる。それがイエス様の言葉に力を与える、神様の権威です。この神様の権威を認めて、信じて、百人隊長はイエス様の言葉を求めました。そんな彼にイエス様は、こうお答えになりました。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」すべてを支配しておられる神様の権威が、わたしの言葉にはあると信じるなら。どこにいても、どんな人にも、どんなことにも働きかけて、神様の思いを実現することができる、あなたがわたしを信じるのなら。あなたが信じたとおりになるように。そう言って、イエス様はこの百人隊長を送り出したんです。

ちょうどその時、彼の僕の病気は癒やされた。そう伝えて、この出来事は締めくくられています。

イエス様の言葉を求めた百人隊長が、信じたとおりに。すべての命を創られた神様の権威が、イエス様に与えられているということ、彼がまっすぐに認めて信じたとおりに。その癒しの出来事は起こされました。

願い求めた百人隊長も、彼の願いを聞いたイエス様も、その一部始終に立ち会った人々も、誰も見ていないところでひそやかに、でも確かに実現したんです。イエス様の言葉には、すべてを支配しておられる神様の権威がある。そう信じてイエス様に頼って、イエス様の言葉を求めた百人隊長は、まさに信じたとおりの確かな答えを与えられました。

権威を持つ人の言葉には、他のものを従わ

せる力があることを、この百人隊長は自分の経験として知っていました。同じように、旧約聖書の預言者イザヤもまた、すべてを従わせる権威がある神様の言葉の力を知っていました。

「主は言われる」と宣言して、イザヤは神様の言葉の力をこう証言しています。

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、
種蒔く人には種を与え、
食べる人には糧を与える。
そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ、
わたしが与えた使命を必ず果たす。」
(イザヤ55:10-11)

神様の言葉は、神様が望むことを成し遂げて、神様が与えた使命を必ず果たす。イザヤが証言する、この神様の言葉の力を信じるなら、すべてのものを形づくり、私たち一人一人に命を与えておられる神様の権威を、信じて頼るなら。神様の言葉はどんな時にも、どんな人にも、どんな出来事にも働きかけて、神様の愛と正しさを実現してくださいます。

ヨハネによる福音書は、イエス・キリストを「肉体を持ってわたしたちの間に宿られた、神の言」だと、まず初めに告げ知らせました。まさにそのとおりに、独り子の命と引き換えにしても、私たちすべての人を滅びから救おうと望まれた神様の愛を、イエス様が実現なさいました。

肉体を持ってわたしたちの間に宿られた、神の言。イエス様は今この時も、神様の権威をもって、聖霊によって、私たちの間で働いておられます。

私たちが生きるこの世界は、私たちの力や思いだけではどうにもならない苦しみや悲しみに満ちています。争いも暴力も差別も、理不尽な事件や事故も、病気や怪我も、いつだって私たちのすぐ身近なところにあります。どうしようもない、誰にもぶつけようのない怒りと絶望が、私たちが生きるこの世界を重くしく覆っています。その真ただ中で、イエス様は神様の権威をもって、私たちを招いておられるんです。

どんな時にも、どんな人にも、どんな出来事にも働きかけて、神様の愛と救いの出来事を実現できる権威あるお方が、「従って来なさい」と一人一人に呼びかけておられます。

私たちを取り巻くどんなものも、神様の愛に向かって動かす力が、イエス・キリストというお方には確かにあるのです。このお方に信頼して、イエス・キリストによって、私たちはすべてを動かす神様の力と愛に期待しようではありませんか。

「あなたが信じたとおりになるように。」

そう言って、イエス様は今日も私たち一人一人を、それぞれの歩みに向かって送り出しておられます。

行きなさい、あなたが信じたとおりになるように。お祈りいたしましょう。